

礎 —虹を架けた者たち(百瀬伸夫 前編)



イラスト：小田桐 昭 (東京・S13)

違いがわかる男 ヒト 百瀬伸夫

オクラホマでみた夢

後に百瀬と共に社の国際化を牽引することになる大島文雄は、百瀬との運命的な出会いをこう振り返る。「あれは1960年、私が全米の大学生と日米関係について

討論するために各州を回りオクラホマ大学を訪れた時でした。立錫の余地もないほど学生で溢れたホールで討論が始まったのですが、日本の一人当たりのGDPを問われて私は答えられず、ステージ上で途方に暮れていました。その時です。突然ホール最後尾にいた見知らぬ東洋人風の学生が、右手をまっすぐに上げ、文法的に完璧な英語と朗々と響き渡るパリトンで、戦後日本経済の奇跡的復興の歴史を要約しつつ、正確な数字を小数点以下一桁まで答えてくれたのです。会場にいた

ほぼ全員が賞賛の表情で彼の方を振り返りました。正確な英語と驚異的な記憶力。論理的思考と外国人に聴きやすい堂々とした態度。私たちが後に知ることになる百瀬の特徴はすでに学生時代に発揮されていたのだ。

百瀬の祖父は明治時代にアメリカ留学の経験がある著名な英語学者だ。新渡戸稲造に師事し、夏目漱石がロンドンに留学した後の一高の英語教師を引き継いでいる。晩年は駿台予備校の看板英語教師を勤め、おかげで百瀬は授業料を免除されたという。父は高校時代に英語の成績が悪いと、曾祖父の名を知る教育長に校長が頭を下げるのを恥と感じ、その経験が英語を極める原動力になったと思います。次男の岸伸久はそう回顧する。

早稲田大学ではESSクラブに入り英

語に磨きをかけながらジャーナリストを志すが、偶然目にした雑誌の記事が彼の人生を変える。吉田秀雄社長の強烈なリーダーシップ、広告ビジネスの近代化への執念、そしてマーケティングの時代到来を予感させるその記事は、青年の心を強烈に捉えた。電通への就職を熱望するが卒業の年には採用がなく、捲土重来を期してオクラホマ大学の大学院に留学し、広告・マーケティングを専攻する。大島の窮地を救ったのはその頃のことだ。留学中も電通に熱烈なラブコールを送り続けた百瀬の元について朗報が訪れ、1962年1月に入社を果たす。吉田社長がIAAのマンオブザイヤーを受賞し、電通インターナショナル構想を発表し、ヤング&ルビカムとの提携に踏み切ったまさにその直後に百瀬の電通ライフはスタートするのだ。天が与えた出会いと言わざるをえない。

ネスレとの出会い

国際広告局を経て国際連絡局へ。いまだ外資系広告主が未開拓の時代にタッパーウェアの扱いを獲得。高峰秀子を起用したTVCMと、主婦で役員にした神宮球場の上空から社長がヘリコプターで降り立つという大型イベントが成功し、扱いは急拡大する。1967年にはさらに大きなチャンスが訪れる。ネスレ日本のマギーのプレゼンダ。競合相手は全世界でネスレを担当し

ているマツキャンエリクソンとレオパネット。強敵である。プロジェクトチームは、綿密なターゲットインサイト分析を重ね、後に広告コピーのお手本にもなる「おはようマギーです」のスローガンを開発する。当時のチーム全員が驚いたことがある。チームを牽引する若き営業は、従来の連絡のイメージを払拭し、吉田社長が目指すA Eの理想像を完璧に体現していたことだ。

百瀬の市場分析、キャンペーンコンセプトの説明から始まったプレゼンは、当時としては珍しく全てを通訳なしで英語で乗り切った。プレゼン勝利を伝えるネスレ日本副社長の言葉が記録に残っている。「我々は多くの広告会社からプレゼンを受けていました。中にはCR表現や媒体の使い方、販促計画などの面で、興味深いアイデアもありました。しかし、これらのプレゼンに共通する弱みは、「統一性」と「連続性」に欠けていたことです。一方、電通のプレゼンは、各所に良い内容があるばかりでなく、コンセプトからはじまって、CR、媒体、プロモーションに至るまで考え抜かれた統一性がありました。その点が他社になり電通の優れた点であり、ネスレが電通を担当に決定した重要な理由の一つです」。完璧なA E制は、それを要求するクライアントが存在してこそ初めて実現する。百瀬はネスレの広告哲学が自分が目指してきたものと同じことに感銘を受けるとともに、インテグリティとコンシステ